◆第13回　フリーストール牛群の問題点

～フリーストール導入は規模拡大を視野に～

フリーストール飼養に踏み切った農家は、それなりに勉強をした上でのことと思われますし、また紙面も限られているので、基本的なことは触れません。

ただ一つ、常識が間違っていることがありますので、それについてだけ触れます。それは小規模フリーストール牛群のことです。「乳期一群管理は可能」だとか酪農雑誌に出ていますが、それはウソです。

例えば１日乳量３０キロの設定でＴＭＲの設計をしますと、いくら乾物摂取量が増えたとしても４０キロや５０キロの乳量の牛には対応できません。そうすると飢餓性脂肪肝になります。乳量が２５キロとかに落ちてくると食餌性脂肪肝になります。

つまり現在、スタンチョン牛舎分離給与で飼養している農家で、乳量に応じた飼料給与ができていない不良農家の典型パターンに完全にはまってしまいます。少なくとも泌乳期は２群に分け、ＴＭＲは２種類作らなければ理想的な状況にはなりません。

百歩譲ってＴＭＲを１種類にした場合、群は２群に分け、高泌乳群にサプリメントをトップドレスで給餌するか、低泌乳群に粗飼料をボトムドレスで給餌するかになりますが、これではＴＭＲのメリットが半減します。

また乾乳期の群分けが物理的にできないケースをよく見ます。最低でも乾乳前・中期と後期の２群に分けなければ、牛群の健康は維持できません。百歩譲った案としては、連動スタンチョンの活用しかありません。

さらに、立派なミルキングパーラーが増えていますが、これは３００～４００頭の牛を一日中搾り続けて初めて採算ベースに乗る施設と言われています。牛乳が衛生的に搾れるのなら、立派なパーラーは不要です。

結局、フリーストールは大規模牛群で初めてその実力が発揮できる施設です。フリーストールに踏み切る場合には、明確に規模拡大の経営戦略を持つべきです。

農業共済新聞　岩手版　2003 年 8 月 4 週号より